

私の仕事 この一年

神戸大学附属図書館

有馬良一

昨年の4月より神戸大学附属図書館に勤めはじめ、早いもので、もう1年が経とうとしています。自分自身でこの1年の仕事を振り返るとともに、大学図書館における仕事の内容を、そのほんの一部ではありますが、皆さんにお伝えできればと思います。

神戸大学の図書館の特徴として、いわゆる中央館というものが実質存在せず、各分野に特化した9つの図書館群から附属図書館組織が構成されていることが挙げられます。私が現在勤務しているのは、その中の1つ、法学・経済学・経営学など社会科学の分野を主に取り扱う社会科学系図書館です。私は、そこで、「情報サービス係」に配属となり、直接サービス全般に関わる業務に携わっています。

情報サービス係の主な業務はカウンター業務（貸出・返却・レファレンスその他受付）ですが、その他にも ILL の依頼・受付や館内利用スペースの整備など、利用者に直接的に関わる事柄の大部分を担っています。

また、神戸大学附属図書館では、係の仕事のほかに、ワーキング・グループ（WG）での仕事というものが割り振られます。今年度に私が割り振られたのは、ラーニング・コモンズ（LC）の整備や協同学修関連のイベントの企画・立案を行う「サービス企画 WG」および、特定のテーマに沿った展示を一定期間行う「展示 WG」の2つでした。以上、情報サービス係としての業務と2つの WG での業務が、私の図書館司書としての最初の1年の主な仕事でした。

カウンター業務では、経験の大切さと落ち着いて対応することの重要性を実感することが多いです。カウンターにいと、その場ですぐに調べて回答しなければならないことが大半であるため、どうしても焦ってしまいがちになります。そして利用者が去った後で、これも言っておけば良かった、調べておけば良かった、失敗したと思うことも少なくありません。また、入職してすぐのころには自分よりも学内の勝手や図書館のルールに詳しい学生や教員に対応しなければならなかったため、利用者から厳しい言葉を浴びることもありました。今になって思えば、入職前にもう少し就職先のルールや周辺状況についてリサーチしておけば良かったかなとも感じています。

しかしながら、直接利用者に対応するということは、他の係ではなかなか機会のない利用者との生の体験が多く得られ、利用者の顔が分かっただけで対応ができるということです。ともすればデータ上の存在になってしまう利用者、実際にコミュニケーションをとることは、大変なことも多いですが、とても貴重な経験であると感じています。他の部局に異動になったとしても、この経験はサービスを行うにあたり非常に生きてくるのではないかと感じています。

サービス係では、カウンター対応の外の主な業務として ILL 文献複写の依頼を行っています。こちらの業務では、大学時代に学んだことが顕著に生かされています。ツールを多く知っていること、情報を入手するために可能な限りあらゆる手段を駆使できることがこの業務では重要になってくると感じています。大学時代に講義で習得した知識と、実際に情報検索を繰り返す経験の中で獲得した技術によって情報を検索できるようになることは、当然ながら業務において非常に役立って来ますが、自分自身大きな達成感が得られ、より多くの技術を身につけるモチベーションへとつながっています。

このように業務をしていくうえでは、知識と経験の両輪の大切さを意識させられることが多いです。当然のことなのかも知れませんが、その両方を重視することが仕事をする際には重要になってくるのだということを強く感じさせられています。

知識と経験という意味では、前述したWGも大きな存在となっています。神戸大学では現在LCの設置・運用が積極的に行われています。そのLCでのイベント企画や新たに設置するLCのための素案作りのために、サービス企画WGの一員として、他大学における様々な特色あるLCを知り、実際に訪れる機会も得られました。去年までは1ユーザとして使用していた空間を別の側面から眺めることで、新しい面白さを発見するとともに、運用の難しさや実現する上での種々の問題にも気づかされました。

また、偶然2015年は阪神・淡路大震災からちょうど20年の節目にあたるということもあり、展示WGでは阪神・淡路大震災を主題とした展示を行いました。その中で、震災時における神戸の様子やその後の復興について、加えて神戸大学図書館における対応（震災文庫の設置など）を知ることができたのみならず、現在の震災経験者からの意見をアンケートなどを通して、またはカウンターに立っていることで知ることができたことは、神戸に所在する大学に勤めるうえでも、震災をよく知らない世代の人間としても、とても良い経験となりました。

在学中は図書館をあまり活用しない学生だったため気づきませんでした。職員として1年間大学の図書館に勤めてみると、図書館側は様々なサービスの提供や利用のための工夫を凝らしていることに驚きました。学生時代の記憶がまだ新しいうちに、今度はサービスの提供側として、どうしたら図書館が実施しているサービスを学生にアピールできるのかということを担当の課題にしたいと思っています。

完璧なサービスというものには存在しないとは思いますが、経験を積むことでより良いサービスを模索し、提供できるよう今後とも業務に励んでいきたいと思っています。

山梨県立図書館

西川 奈緒

司書になって1年が経とうとしていますので、ご報告させていただきます。

私は、平成26年3月に同志社大学文学部国文学科を卒業し、4月から山梨県立図書館資料情報課資料担当の司書として働いています。

まず、現在私が従事している業務について簡単にご報告します。始めに、司書全員が取り組む「カウンター業務」があります。カウンター業務は、視聴覚資料や新聞を主に扱う1Fサービスカウンター、児童資料・子ども読書支援を行う児童カウンター、一般書、マイクロフィルムを扱うほかレファレンス調査を行う2Fサービスカウンターの1つのカウンターにおいてシフト制で対応します。山梨県立図書館ではカウンター業務のみを行う雇用形態はほぼありませんので、司書全員がそれぞれの担当業務を抱えながらカウンターで直接利用者対応を行います。カウンター業務のほか、私の業務は資料担当のうちの「資料除籍にまつわる業務」と、「外国語資料の受入管理」などが主なものです。資料除籍にまつわる業務は、資料の汚損・破損・紛失を扱うもので、返却利用者に弁償を求めるほか、返却者に心当たりが無い場合には資料選定委員会に買い替え検討を求めて蔵書から除きます。また、弁償や買替程度ではない汚損・破損資料に関しては修理担当と相談しながら次の利用ができるよう対応します。外国語資料の受入管理は、購入・寄贈などで納品された外国語資料の整備を行うもので、言語は英語だけでなく、中国語、台湾語、韓国語を始め、フランス語、イタリア語、ロシア語など多岐に渡ります。

次に、この1年を通して考えたことをご報告します。学生時代に、司書となるべく勉強し考えてきたことと、実際にこの1年司書として働き感じていることの間には、多くの転換がありました。その中で特に印象深く感じているのは、「どんなことでも仕事に生きる」ということと、「土地とどう結びつくか」です。

まず、「どんなことでも仕事に生きる」ことについては、司書課程の講義で学んだことは残

らずそうですが、司書課程ではない講義も、講義の外で知ったことも、思わぬところで業務に活きる時が来ると知りました。例えば、私はロシア語に興味があり、大学時代入門程度のロシア語を学びましたが、外国語寄贈図書を受入管理を行う場合には、キリル文字が読めるということが大変手助けとなりました。興味本位で学んだ言語を活かす機会が来ようとは思いませんでしたが、このように「まさかここで活きるとは」という体験は、司書になってから何度もありました。ほんのかいつまんだ知識でも、情報探索のヒントとなったり、レファレンスインタビューで利用者から多くのことばを引き出すきっかけとなったりと、何がどこで活きるか分かりません。そのため、司書課程の講義でも「情報へのアンテナをよく張ること」とありましたが、この世の何に対してもどうでもいいなどとは思わず、興味を持って面白がって日々生活し、知識を蓄えていくつもりです。

また、「土地とどう結びつくか」ですが、私にとってこの1年は山梨という場所とどう交わるかを考える年でした。学生時代司書を目指している時には、受験のため「図書館のこと」、「情報のこと」を特に勉強しましたが、司書になってからは、それらは図書館サービスを行う上であくまで前提の知識であり、特に公共図書館では「その土地」の知識が強く求められるということを実感しました。

私は、生まれも育ちも山梨とは関わりがありません。司書の職は求人が少ないため全国へ就職先を求める受験生が多いと思われませんが、私もそのひとりで、就職とともに山梨に来たため、山梨の知識は恥ずかしながらほとんどありませんでした。しかし、公共図書館は土地と強く結び付いており、その地域に関するレファレンスが多く寄せられます。また、そこで働く司書は当然土地をよく知る者として、県内外を問わず扱われます。一刻も早く山梨に詳しくなりたいと、文献を読んだり、研修を受けたりなど行いましたが、何より山梨の知識を深めたのは利用者、同僚、友人などとの交流でした。「知りたい」と身を乗り出す者には情報が与えられるもので、山梨を知りたいと積極的に示すほど、多くの方が私に山梨を教えてくださいました。特に、県庁の同期は百人ほどいますが、彼らとの交流を通して、山梨県の一般知識を深めるばかりでなく県民性や県の常識なども知ることができました。更に、学芸員や文化財主事を始め行政、農政、林務、県土整備、福祉保健など多様な業務に就く彼ら同期との交流は、それぞれの専門知識を知ることができ、かつ情報アクセスの手段や図書館の使い方など図書館に関して伝えられる機会でもありました。山梨に就職を決めたときには、「今まで縁のなかった新しい土地で司書としてやっていけるだろうか」と不安に思いましたが、山梨を知りたいと積極的にアピールすることで様々な方向から山梨に関する知識（と、関連して幅広い情報）を得ることができると分かりました。今後は、これらの情報を得るばかりでなく、司書としてどう還元し一層土地と結びついていくかを考えていこうと思います。

以上が、私が司書として現在行っている主な仕事と、考えていることについてです。働き出して1年弱、毎日新たな発見や壁があり知恵熱が出そうな日々を過ごしています。これからは、2年目の司書としてこれまで培った経験や考えを活かすべく、一層広く精力的に動き回ろうと思います。報告を終わります。